

# 大学生の不登校傾向（回避行動・回避感情）と 具体的な獲得的レジリエンスに関する検討

谷口実彩

(広島国際大学大学院心理科学研究科)

## 目的

近年、大学に入ってから不登校となる人の数は増加傾向にあり、レジリエンスが注目されている。レジリエンスとは、ストレスフルな出来事によって傷ついても、そこから立ち直っていく精神的な回復力のことである(平野, 2011)。

小塩他(2002)による研究では、レジリエンスは「肯定的な未来志向」「新奇性追求」「感情調整」の3因子で構成されることが示されている。

また、レジリエンスを二次元でとらえる視点もあり、平野(2010)による研究では、持って生まれた気質と関連の強い要因とされる「資質的レジリエンス」と、後天的に身につけていきやすい要因とされる「獲得的レジリエンス」の二次元の性質を持つことが示されており、資質的レジリエンス要因として「楽観性」「統御力」「社交性」「行動力」、獲得的レジリエンス要因として「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」の7因子が見出されている。

資質的レジリエンスは、従来のレジリエンスと近い概念であり、これまでも研究されてきた。しかし、大学生の不登校と獲得的レジリエンスの関係性についてはこれまであまり研究されてこなかった。獲得的レジリエンスはトレーニングによって高めることができるため、不登校の改善に役立てることができるとして注目されている。

そこで本研究では、大学生の不登校傾向（登校回避行動・登校回避感情）に関連する具体的な獲得的レジリエンスを検討することを目的とした。

## 方法

**対象者** A 大学に在学する学部生 116 名のうち欠損データ 5 名を除く 111 名。

**手続き** 講義開始前に無記名の質問紙を配布し、その場で回答を求め回収した。

**質問紙** 1)大学生不登校傾向尺度(堀井, 2013)

「登校回避行動」「登校回避感情」の2つの下位尺度からなり、大学生の正課活動に対する回避傾向を測定した。項目数は、登校回避行動に関する6項目、登校回避感情に関する6項目の計12項目。回答

は、「非常にあてはまる(6点)」～「全然あてはまらない(0点)」の7件法で求めた。高得点ほど不登校傾向が高いことを示す。

2)二次元レジリエンス要因尺度(平野, 2010)

資質的レジリエンスとして4因子、獲得的レジリエンスとして、「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」の3因子の計7因子からなる。獲得的レジリエンス要因は9項目。回答は、「まったくあてはまらない(1点)」～「よくあてはまる(5点)」の5段階で評定する。高得点ほどレジリエンスが高いことを示す(資質的レジリエンスについては、今回の分析では使用していないため割愛する)。

## 結果

登校回避行動の項目2「なんとなく大学に行かないことがある」は、獲得的レジリエンスの項目2「自分の性格についてよく理解している」、項目9「他人の考え方を理解するのが比較的得意だ」との間に有意な相関が見られた。

登校回避感情の項目1「日曜日の夜、明日大学に行きたくないと思うことがある」と獲得的レジリエンスの項目7「嫌な出来事がどんな風に自分の気持ちに影響するか理解している」、また、登校回避感情の項目2「朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある」と獲得的レジリエンスの項目4「自分の考えや気持ちがよくわからないことが多い」との間に有意な相関が見られた。

## 考察

本研究では、大学生の不登校傾向（登校回避行動・登校回避感情）に関連する具体的な獲得的レジリエンスを検討することを目的とした。相関分析の結果、登校回避行動には自分の性格を理解すること、登校回避感情には自分の性格を理解することに加え、自分の気持ちの状態を理解することが重要であることが示唆された。

## 主な引用・参考文献

平野真理(2010). レジリエンスの資質的・獲得的・獲得的の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成. パーソナリティ研究, p.19,94-106 他